

神奈川県内出土の大堀相馬焼について

野坂知広

1. はじめに

大堀相馬焼は、福島県を代表する伝統的工芸品であり、現在も生産が続けられているが、考古学的には近世・近代の地方窯とその製品（陶器）として知られている（註1）。神奈川県ではなじみの薄い遺物であるが、実際の発掘調査では少ないながらも出土するため、今回取り上げた。というのも、筆者は学生時代を中心に福島県内、特に生産地（双葉郡浪江町大堀地区）に近い浜通り地方の遺跡調査に関わっていたことがあり、大堀相馬焼の出土資料に触れる機会が多かったという経緯がある。その後数年間勤めた東京都新宿区の江戸遺跡においても、大堀相馬焼は一定量出土しており（註2）、さらに検討を加える契機となった。現在も近世・近代陶器は門外漢とうそぶきながら、継続して研究を進めている（註3）。

ここでは、管見に触れた神奈川県内出土の大堀相馬焼を集成し、形態的特徴や時期的変遷など、現状で分かっている年代観を参考にしながら、神奈川県における時期的・地域的な出土傾向を明らかにしていきたい。

2. 出土資料の概要

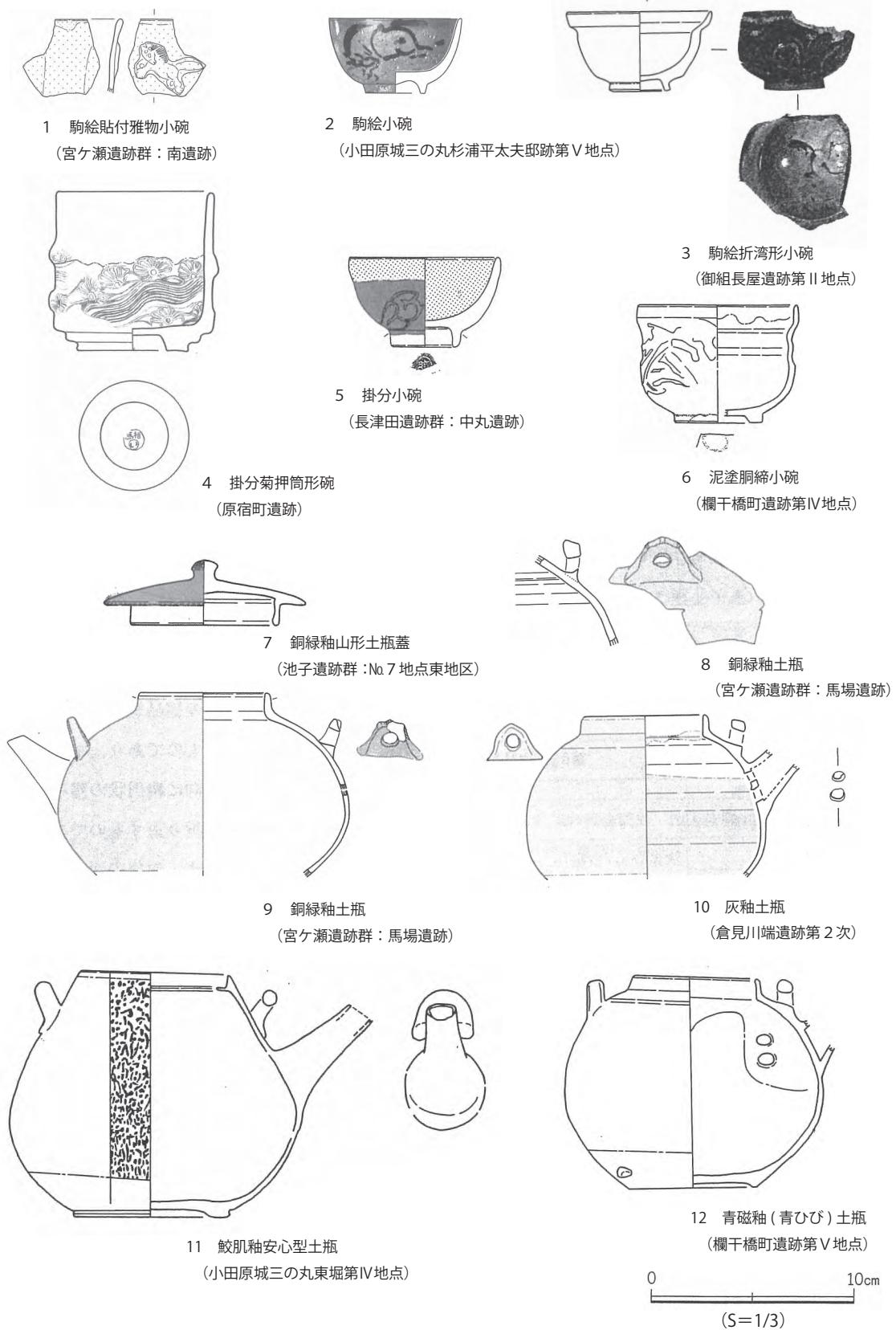
県内報告書を悉皆調査したわけではないので、これすべてではないが、目に付いた資料を第1図に図示した。おおむね19世紀代以降の資料が主体であり、古いものでも19世紀前半、新しいものは大正～昭和初期まで降るものも見受けられる。なお、そもそも近代資料は報告書に掲載される機会が少ないことを確認しておく。以下、器種毎に個別に記述する。

（1）碗・小碗（第1図1～6）

第1図1は、清川村宮ヶ瀬遺跡群南（No.2）遺跡（註4）の遺構外出土の駒絵貼付雅物小碗（註5）である。口縁部～胴部の破片資料のため、全体像は詳らかでないが、報告書の記述によると、「口縁部は若干端反気味をなし、多角形を呈するものである。また、胴部側面には駒の陽刻が見られることからは、型押しによる成形が想定される。胎土中には黒色粒子を多量に含み、内外面に透明釉を施した後、口縁端部に緑白色の釉薬を上掛けしている。」とあることから、いわゆる手捻り雅物碗の類であることは明らかである。

雅物とは、近代相馬焼に特徴的な技法であり、胎土中に多くの鉄分（砂鉄）を混入させる。高台部以外はロクロ成形されることも多いが、口縁部が角鉢のような多角形を呈しているとなると、報告書の記述通り、型成形の可能性も否定できない。ただし、大堀相馬焼の駒絵貼付は、駒部分のみ型押しのものを後から貼り付けることが多い。雅物碗の器壁は比較的薄手となる傾向にある。なお、駒絵貼付には見込みに貼り付けるものと胴部外面に貼り付けるものがある。いずれにしても近代に多い資料である。同じ上段面・下段面からは、明治前半のものと推定される酸化コバルトによる型紙摺絵の磁器も出土している。

第1図2は、小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡第V地点（註6）の92号土坑出土の駒絵小碗である。いわゆる平形の湯呑碗であり、外面に大きく鉄絵（マンガン釉）で走り駒（右駒=左向きの馬）が描かれている。鉄絵の上から透明釉（報告書では長石釉）が掛けられているが、器面はザラザラとした質感であり、胎土中の砂粒が湧出し、ロクロ整形により動いている。これは砂手と呼ばれる胎土であり、大堀相馬焼というより



第1図 神奈川県内出土の大堀相馬焼 (各報文より)

は、相馬駒焼（田代窯）（註7）に近い。ただし、砂手風の大堀相馬焼も存在することから、これをもって相馬駒焼と断じることはできない。報告書の遺物観察表にはなぜか「鳥文」と書かれているが、馬文の誤字であろう。明治後半～大正の年代観が与えられている。92号土坑の廃絶年代は昭和初期であるという。

第1図3は、小田原市御組長屋遺跡第II地点（註8）の3号井戸址出土の駒絵折湾形小碗である。外折・外反する口縁部が特徴的だが、報告書の記述によれば、胴部外面には駒絵貼付があり、内面見込みには鉄絵で見返りの駒（左駒＝右向きの馬）が描かれている。内外面ともに灰釉が施される。遺物観察表には18世紀とあるが、報告書本文には「幕末期の北関東～東北地方の製品とも考えられる」とあり、3号井戸址は19世紀前半～後半の遺構となっている。遺構の年代に即した年代観で理解しておいてよいものと考えられる。

第1図4は、横浜市原宿町遺跡（註9）のH-10区132号土坑から出土した掛分菊押筒形碗である。いわゆる筒形の湯呑碗であり、大堀相馬焼では大正～昭和初期にかけて大量に生産されたことが知られている。口縁部外面から内面にかけては青磁釉が厚く掛けられ、胴部外面下半は鉄釉（柿釉）と呼ばれるが、実際には立体的な造形となっている。波打ったような櫛引きの多条沈線は「海面」、菊の花のようなスタンプ文は「菊押し」と大堀相馬焼の産地では呼ばれる。なお、上半から内面の青磁釉は貫入が特徴的でもあり、「青ひび」と呼ばれる。青ひびは、現代相馬焼の最大の特徴でもある。

本資料の高台内には丸枠「相馬」印があるが、筆者が特に注目するのはその下の○に「い」の印である。屋号の「マルイ」とも読めるが、かかる屋号印は、現在も続く「いかりや窯」という大堀相馬焼の窯元の製品の可能性が高い。

第1図5は、横浜市長津田遺跡群中丸（No.4）遺跡（註10）の遺構外出土の掛分小碗である。いわゆる平形の湯呑碗であり、口縁部外面上半および内面には灰釉、外面下半には鉄釉が施されている。報告書によれば胴部外面に木葉状の陽刻がある。高台内には判読不明の印があり、楕円形枠「相馬」印と読めるような気もするが、判然としない。外面の陽刻が駒絵貼付ではなく、高台内も相馬印でないとすると、何をもって大堀相馬焼と判断したのか分からぬが、相馬焼の可能性を積極的に評価したのであろう。表土直下からの出土でもあり、近代資料と捉えてよいだろう。

第1図6は、小田原市欄干橋町遺跡第IV地点（註11）の遺構外（IV層）出土の泥塗胴締小碗である。口縁部外面上半から内面は灰釉、口縁部外面下半から胴部外面は鉄釉が掛け分けられている。胴部外面はわずかに立体的な造形となっており、大堀相馬焼では「泥塗り」技法と呼ばれる。口クロ成形であるが、口縁部から胴部にかけては段を持っており、胴締形ともいう。江戸遺跡出土の銅緑釉の胴締碗は、その外見から「キャベツ碗」と通称されることもある。おおむね19世紀前半の年代観が与えられている。なお、推定口径78mmであるから碗としてもよかつたが、ここでは一応小碗としておく。というのも、江戸遺跡の泥塗胴締碗には小碗よりも碗に分類される資料が多いからであり、あまり厳密に分類することに大きな意義は感じられない。

（2）土瓶（第1図7～12）

第1図7は、逗子市池子遺跡群No.7地点東地区（註12）の第8号ピット群出土の土瓶蓋である。器形は山形で、外面に銅緑釉を施し、擬宝珠状の摘み部は菊花状となる。報告書によれば、「精良な胎土から」19世紀代の大堀相馬焼と判断したことだが、江戸遺跡出土のいわゆる青土瓶（銅緑釉土瓶）には産地不明問題があるため、明確に大堀相馬焼とは断じがたいのが現状である。本報告書がそうであるように、1990年代の発掘調査報告書では青土瓶を大堀相馬焼としている事例が多く、2000年代以降は産地不明になっていることが多い傾向にある。これは、そもそも伊賀・信楽系の青土瓶の模倣商品としての大堀相馬焼という判断で

あったものが、北関東の諸窯でも同じような製品を作っていることが指摘されて以来、産地不明と記載するのが主流となつたためである。ただし、北関東系の青土瓶の具体例と言わると事例は少なく、大堀相馬焼ほどの大きな生産地は見当たらないのも事実である。大堀相馬焼の胎土はまさしく精良であり、伊賀・信楽系の胎土には劣るが、北関東系諸窯の胎土に比べると肌理が細かく、造りも上手で、個体差はあるが極めて薄手の土瓶も数多い。北関東系との判別よりも、伊賀・信楽系との判別が出来ないために産地不明とされているのが実情に近いのではなかろうか。

第1図8は、清川村宮ヶ瀬遺跡群馬場（No.6）遺跡（註13）のK10号遺構群遺構外出土の銅緑釉土瓶であり、第1図9も同じく清川村宮ヶ瀬遺跡群馬場（No.6）遺跡の北側斜面遺物包含層出土の銅緑釉土瓶である。遺存状態に差異はあるが、おおむね算盤玉形（扁平形）の青土瓶であり、釣手を付けるための把手部は型作りとなっている。報告書では大堀相馬焼としながらも、「北関東系の可能性もある」と併記されている。これも大堀相馬焼とは断じがたい資料であろう。

第1図10は、寒川町倉見川端遺跡第2次調査（註14）の遺構外出土の灰釉土瓶である。器形は丸形で、漉し穴は2穴、把手部は型作りとなっている。かかる資料をなぜ大堀相馬焼と判断したかは定かでない。同様の灰釉土瓶は江戸遺跡では信楽系に多く、その模倣商品が多い大堀相馬焼の生産地に類例がないわけではないが、江戸市場向けの土瓶は銅緑釉の青土瓶が主体であり、生産地では青土瓶に次いで多い糠白釉の土瓶は、江戸遺跡ではほとんど見られない。鉄釉（黒釉・飴釉）の土瓶も少数は出土するようだが、胎土だけで大堀相馬焼とは断じえない資料であろう。

第1図11は、小田原城三の丸東堀第IV地点（註15）の堀上層出土の鮫肌釉安心型土瓶である。外面全体にちぢれの強い鮫肌釉が施され、器形は安心型で、土瓶としては珍しい高台を持つ。口縁部には蓋受けがあり、把手部は手捻り作りのリング状となる。なお、安心型土瓶という呼称は、生産地では通じるが、江戸・東京などの消費地遺跡では知られておらず、その器形からティーポット形などと呼ばれることがある。高台部を持つということは、原則直接火にはかけないということであり、まさしくティーポットや急須のような使い方をするものであろう。ここでは出土していないが、安心型土瓶の蓋には蒸気抜きの小穴が穿たれることが一般的であり、これも急須と極めて類似している。

鮫肌釉も近代大堀相馬焼に特徴的な釉薬であり、「勿来手」とも呼ばれる。瓦吹堅氏による茨城県北部の松岡焼に関する一連の研究（註16）によると、当該地方における鮫肌釉は松岡焼で18世紀後半以降一般化し、近代に至ってから大堀相馬焼に採用された可能性が示されている。命名由来となった福島県いわき市勿来は、松岡焼の産地である茨城県高萩市や北茨城市にほど近い地勢にある。ちなみに、明治前半期の大堀相馬焼には、「勿来景気」と呼ばれる大盛況があり、かかる勿来手の土瓶がアメリカで一大ブームとなったため、大量に輸出されたことが知られている。

第1図12は、小田原市欄干橋町遺跡第V地点（註17）の5号土坑出土の青磁釉土瓶である。器形は丸形で、口縁部下の肩部にわずかに稜が巡る。漉し穴は2穴で、把手部は型作りである。底部付近には三足が付くが、地面には触れていないため痕跡器官のようなものであろう。図面では分からぬが、器面全体に青磁釉が掛けられており、細かい貫入が観察される。近現代相馬焼を代表する釉薬である「青ひび」の古い形式と考えられる。5号土坑の年代観は明示されないが、伴出遺物の多くは19世紀前葉～中葉とされている。本資料も同様の年代観で捉えておいて大過ないと考えられる。

3. 出土資料の年代観

前節では出土資料の概要について記述した。（1）碗・小碗は、第1図5以外はおおむね大堀相馬焼であることが確かめられているが、（2）土瓶は、産地が明らかなものは第1図11のみである。そもそも土瓶は産地不明の資料が多いが、青土瓶（銅緑釉土瓶）の産地同定については今後とも整理が必要であろう。

大堀相馬焼の出土資料の年代観については、生産地における編年が確立されていないため、消費地遺跡における遺構年代から組み立てるしかない。これまで仙台城の出土資料を主体とした関根達人氏による大枠の編年（註18）が知られるのみだったが、近年、村山卓氏による埼玉県栗原宿跡出土の大堀相馬焼碗類の検討（註19）がある。江戸近郊における宿場町の事例ではあるが、実際の遺構年代に依拠した年代観が示されているため、大変参考になった。筆者が以前、新宿区出土資料を基に予察として検討した結果と大きな齟齬はなく、例えば第1図6のような泥塗胴締碗（村山分類による碗II類）は、新宿区の資料では19世紀第II四半期や19世紀中葉の廃絶年代の遺構から出土しており、栗橋宿跡でも19世紀前半に止揚されている。

第1図3の駒絵折湾形小碗は、駒絵貼付の技法が使われているので近代に持つていきたい気もするが、出土遺構は19世紀前半～後半である。高台が「ハ」の字状に外反する点は近世的であり、内面見込みの駒絵（見返り駒）はより古手（18世紀末～19世紀初頭）の碗類にも散見される描き方である。降っても幕末～近代頃と理解しておくのがよいかもしれない。

第1図1の駒絵貼付雅物小碗は、なかなかに時期を特定できない資料である。伴出遺物には明治前半のものが多いように感じるが、雅物そのものは、大堀相馬焼の伝承によれば、明治初年に天野兼重により創始されたと伝えられている。ただし、近年の発掘調査成果によれば、幕末一括廃棄と考えられる資料に駒絵貼付を持つ雅物碗が含まれることが指摘されており、栗橋宿跡においても村山分類による碗IV・小碗IV類は、幕末～近代頃に比定されている。雅物そのものは現代の大堀相馬焼にも受け継がれており、大正年間を中心操業されたと推定される福島県大熊町西平窯跡（註20）からも同様の資料は出土している。

第1図2・第1図5は、器形的にも似通っており、大正～昭和初期まで降る可能性がある。出土遺構・出土土層から考えても齟齬はない。相馬駒焼のような砂手の第1図2は気になるが、断定できないことは前述の通りである。

第1図4は、これも大正～昭和初期まで降る筒形碗であり、「菊押し」技法が特徴的である。栗橋宿跡でも小碗IX類と分類されており、昭和初期の年代観が示されている。生産地遺跡にも多くの出土例がある。

産地不明問題はありながらも、土瓶の年代観はおおむね把握されており、いわゆる青土瓶の類は器形的に扁平なものほど古く、丸形から隱元形のように器高が高くなるにつれて新しくなる傾向が知られている。把手部は型作りが古く、リング状が新しい。また、蓋受がないものが古く、あるのが新しい。

これらを前提とすれば、第1図8・9（19世紀前葉～中葉）→第1図10・12（19世紀中葉～後葉）→第1図11（19世紀後葉～20世紀前葉）という年代観が示せるだろう。いずれにしても、大堀相馬焼における鮫肌釉や安心型土瓶は明らかな近代資料であり、近世まで遡ることはない。

4. 結語に代えて

以上、神奈川県内出土の大堀相馬焼を概観してきた。少ないながらも碗類は小碗が多く、土瓶は青土瓶が主体となる傾向は把握できた。同様の傾向は江戸遺跡においても同じであり、日常雑器というよりは、茶器・酒器に特化した製品が多い。栗橋宿跡もそうであるが、神奈川県内出土の資料はもちろん江戸・東京を経由



第2図 埼玉県栗橋宿跡における大堀相馬系陶器碗類の変遷 (村山2022より)

して持ち込まれたものであろうから、似通った出土傾向を見せるのであろう。江戸遺跡に大堀相馬焼が見られるようになるのは、おおむね19世紀以降であり、神奈川県内出土のわずかな資料からも、江戸市場への本格参入という販売戦略の大きな転換が窺えるのである。

【註】

- 註1 大堀相馬焼の創業は、元禄年間（17世紀末葉）頃とされている。以来、300年以上の歴史を誇る窯業であるが、東日本大震災と原発事故により甚大な被害を受け、浪江町大堀地区は現在も帰還困難区域のままである。
- 註2 幕末（安政3年）における江戸に入荷した焼物のうち、大堀相馬焼の占める割合は約1.5%であるという（「重宝録」『東京市史稿港湾篇』3）。江戸遺跡における出土量もおおむねその通りの印象である。
- 註3 野坂知広 2012 「大堀相馬焼小史」『史峰』第40号 新進考古学同人会
 野坂知広 2012 「相馬土瓶考」『いわき地方史研究』第49号 いわき地方史研究会
 野坂知広 2013 「ふたたび相馬土瓶について」『史峰』第41号 新進考古学同人会
 野坂知広 2013 「勿来手土瓶について」『いわき地方史研究』第50号 いわき地方史研究会
 野坂知広 2014 「江戸遺跡出土の大堀相馬焼四例」『いわき地方史研究』第51号 いわき地方史研究会
 野坂知広 2018 「幕末から近代における大堀相馬焼の再検討」『いわき地方史研究』第55号 いわき地方史研究会
 野坂知広 2019 「江戸遺跡出土の大堀相馬焼（予察）」『いわき地方史研究』第56号 いわき地方史研究会
 野坂知広 2020 「三たび相馬土瓶について」『史峰』第48号 新進考古学同人会
 野坂知広 2020 「考古学から見た相馬駒焼」『いわき地方史研究』第57号 いわき地方史研究会
 野坂知広 2023 「近代における大堀相馬焼の諸相」『史峰』第51号 新進考古学同人会
 野坂知広 2023 「考古学から見た近代大堀相馬焼」『いわき地方史研究』第60号 いわき地方史研究会
- 註4 近野正幸ほか 1996 『宮ヶ瀬遺跡群VIII』（財）かながわ考古学財団
- 註5 小稿では新宿区内藤町遺跡の器種分類に倣って、口径80mm程度以上を碗、以下を小碗、口径50mm程度以下を小杯と区分している。報告書の記述と齟齬がある点はご寛恕いただきたい。
- 註6 絹川一徳ほか 2022 『小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡第V地点』（公財）かながわ考古学財団
- 註7 相馬駒焼（田代窯）は、相馬中村藩の御留窯であり、民窯（大堀相馬焼）に対する官窯という位置付けになる。正保年間（17世紀中葉）頃の創業と伝えられる。
- 註8 小林義典ほか 2001 『御組長屋遺跡第I・II・III・IV地点』都市計画道路小田原早川線改良工事遺跡発掘調査団
- 註9 木村吉行ほか 2009 『原宿町遺跡・原宿五丁目遺跡第I地点』（財）かながわ考古学財団
- 註10 伊丹 徹 1994 『長津田遺跡群』（財）かながわ考古学財団
- 註11 山口剛志ほか 1998 『欄干橋町遺跡第IV地点』 小田原市教育委員会
- 註12 山本暉久ほか 1997 『池子遺跡群』（財）かながわ考古学財団
- 註13 鈴木次郎ほか 1995 『宮ヶ瀬遺跡群V』（財）かながわ考古学財団
- 註14 阿部友寿ほか 2018 『倉見川端遺跡第2次調査』（公財）かながわ考古学財団
- 註15 諏訪間順ほか 2000 『平成9年度小田原市緊急発掘調査報告書1』 小田原市教育委員会
- 註16 瓦吹 堅 2016 「鮫肌覚書」『いわき地方史研究』第53号 いわき地方史研究会
- 註17 諏訪間順ほか 1999 『欄干橋町遺跡第V地点』 小田原市教育委員会
- 註18 関根達人 1998 「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報』10
- 註19 村山 卓 2022 「宿場町に流通した大堀相馬焼」『施檀林の考古学II』 大竹憲治先生古稀記念論文集
- 註20 安達尊伸ほか 2022 『西平窯跡発掘調査報告書』 大熊町教育委員会

【引用・参考文献】

高橋良一郎 1977 『相馬のやきもの』 ふくしま文庫 福島中央テレビ

内藤町遺跡調査会 1992 『内藤町遺跡』

山田秀安 2001 『大堀相馬焼の歴史』上巻 蒼海社

※その他多くの文献を参考としたが、紙幅の都合上割愛した。